

「乗り越えよう!」その気持ちを支える

掛 志穂

(幼稚園教諭)

小学校教師から幼稚園教師に変わって十年目を迎えた。園児に接して特に思うのは、「体験する大切さ」

である。体験の中で起こる困難に対し、何とか乗り越えようとする時、子どもたちは本当の力を発揮する。心を揺さぶられ、考え、知恵を絞りながら、成長していく。まずやってみないと、そのような成長ができない。そのやってみようとする姿にかかわり、乗り越えようとする気持ちを支えることができた時、幼稚園教師としての醍醐味^{だいごみ}を感じる。

「うわーん、Aちゃん乗りたーい!」

年中児を担任した。新入園児のA君は、毎日赤い

三輪車に乗ることで、母親と離れて過ごす寂しさを紛らわしていた。

そのA君がある日、数人に、赤い三輪車から無理やり降ろされようとしていた。「どうしたの?」と聞くと、「じてんしゃ、貸してくれん……」とA君。「だって、これははじめB君が乗ったんだよ」と隣のクラスのB君たち。A君は泣きながらも、「でも、誰も乗ってなかったもん」と反撃。「少し離れとつただけよ。返してや」と周りの子たち。やっと園生活に慣れてきたA君が安定するように、教師としてB君たちとの交渉を買って出ることできたが、しなかった。A君に、この試練を何とか自分で乗り越えて

掛 志穂 (かけしほ)
 広島大学附属三原幼稚園教諭。「頑張る」ではなく「頑張る」をモットーに、笑顔で笑顔を生む先生を目指しています。

ほしかった。口を出さない代わりに、そばにいることにした。するとA君は「うわーん、Aちゃん乗ってたーい！」と大泣きをして自己アピール。その勢いに、隣のクラスのC君は「じゃあ、こっちの貸してあげようか」と自分が乗っていた三輪車を指さす。それでもA君は「いやだあ、赤いのがいい」。せっかくのC君の提案には耳も貸さない様子。A君は自分でもどうにもならなくなっているとらえ、ついに私は口を挟んだ。「ごめんねえ、C君。どうやらA君は赤いのがいいらしいわあ。言ってくれてありがとうねえ」とC君の思いを受けとめつつ、ほかの提案をした。「じゃあ、B君にあとで貸してねってお願いしてみたら?」。するとA君は泣きながら、「あとで貸してね」と言った。B君は「いいよ」と言い、赤い三輪車に乗ってどこかへ行ってしまった。A君はというと、B君がいつ貸してくれるかと目で追いつながら、ずっとその場で待っていた。

しばらくすると、B君がほかの子とトラブルにな

り、三輪車から降りて先生たちと話をしていた。A君はそうつと赤い三輪車に近づき、さっと乗ってすごいスピードで庭の端までこいで行き、またすごいスピードで帰ってきた。なかなかやるなあと思って見ていると、A君はにこにこ顔でそれを三回も繰り返した。何ともけなげな姿である。その後A君を見ると、B君に怒られ、三輪車も取られていた。どうやら勝手に乗っていたことに気付かれたらしい。それでもA君は泣かずに満足した表情だった。

片付けて保育室に戻ってきたA君をにこにこ顔で迎えながら、「乗れてよかったねえ。今度は周りにいる子に、これ乗ってもいい?」って聞いて乗るといいよ。乗れてよかったねえ!」と優しく両手で握手をしながら喜んだ。A君が自分なりに試練を乗り越えた姿がうれしかった。

「はよ(早く)逃がさんといけんのよー!」

年中児だった子どもたちと一緒に年長クラスに

「持ち上がった」カマキリの卵から、赤ちゃんが産まれた時のエピソードである。

「カマキリの赤ちゃん欲しい！」という友達に対し、D君が「はよ逃がさんといけんのんよ！」と、何とかあきらめさせようと必死である。なぜかというところ、昨年D君自身がカマキリを飼っていて、家族中がエサにするバッタ探しに翻弄され、しかも、最後にはエサがなくて死んでしまったという悲しい経験から、必死に友達を説得していたのである。普段は自分から友達にかかわることの少ないD君。友達に自分の思いを届けて「言ってよかった」と感じるチャンスだととらえ、D君にクラス全体の場を話をしてもらった。「外だったらエサがたくさんあるけど、飼ったつたらエサをいっぱい取りに行かんといけん。毎日毎日大変なんよ」。苦勞を知っているからこそ説得力である。「エサがなかったら死んじゃうんですよ」。クラスの子も一生懸命聞いている。結局、子どもたちはカマキリの赤ちゃんを逃がすことにした。全体の前で話す場を持つことで、D君は少し自信を

持ったようだった。

後日、園庭で、D君と友達がカマキリを見つけた。「先生、カマキリ！ あのカマキリかね」と、うれしそうな表情だった。

ウサギのナナが逃げた！

年長になったらウサギのナナの世話をすることが出来る。子どもたちは年長になって張り切っている。まず、飼育小屋からナナを外のサークルに移動させ、持ってきたエサを包丁で切り、飼育小屋を掃除する。掃除が済んだらエサのセットをし、ナナをまた飼育小屋に戻すのである。飼育小屋とサークルは五メートルほど離れていて、ここをナナは、ドアからドアへ移動する。当番の子が抱っこをしたり、ナナの後ろを追いかけて移動させるのである。子どもたちにとっての難関は、この『ナナの移動』である。移動の途中、ナナが寄り道をして、園庭の隅や飼育小屋の裏に逃げてしまうことがあるからである。

ある日、「先生、大変！ ナナが逃げた！ 早く来

て！」と言うので行ってみると、当番の先生と子どもたちが困っていた。どうやってもナナは飼育小屋の裏から出てこないのである。裏には植え込みがあり、四つんばいになってやっとなれるような狭い場所である。私が入ろうと思えばできないことはなかったが、ここは子どもたちがどう考えて行動するか、待つことにした。「そうだ！　こうやって野菜を置いていたらナナが来るかもー」と飼育小屋の入り口から裏まで点々とエサを置き始めた。おびき寄せる作戦らしい。「こっちから追い出してみるけえ、あっちで待つといて。出てきたら捕まえて」と当番さん。それを見て、近くにいた子どもも手伝い始めた。飼育小屋の裏を右に左に行ったり来たりする子どもたち。しかし、あと少しのところでもいつもナナがUターンしてしまうのである。

「ナナが出てきた時に私が見えたらまた逃げるよ。隠れとこうや」。年長ともなると、やはり賢い。何事かと集まってきた年中や年少の子どもたちにも

「静かに！　見えたらだめよ。隠れて」と指示をしている。肝心のナナはあまりに動き過ぎ、裏でバテていた（ナナはご老体なのである）。

最終的には当番の先生が四つんばいで裏に入り、ナナを確保。この後、年長児がみんなで考えて、飼育小屋とサークルの間に移動式ナナ用通路を作った。ナナがその通路を通り無事移動できた時、子どもたちは飛び上がって喜んだ。苦勞を体験したからこそ、みんなで知恵を出し合い、より良いものが生まれたのである。

たくましく成長する姿に出会えることに感謝している。子どもの気持ちを感じ取れる教師になれるよう、これからも日々学び続けていきたい。



▲移動式ナナ用通路